

事後評価報告書
(日本-EU 研究交流)

1. 研究課題名： 東シベリア北極陸域生態系の永久凍土と温室効果ガスの動態

2. 研究代表者名：

日本側： 北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授 杉本 敦子

相手側： Alfred Wegener Research Institute for Polar and Marine Research, Geoscience Division,
Periglacier Research Unit, Head of Research Unit Hubberten Hans-Wolfgang

3. 総合評価： A

4. 事後評価結果

(1) 研究成果の評価について

永久凍土を凍結状態のまま測定し、当該凍結土壤中に大量の空気が蓄積されていること、メタンフラックスには土壌水の滞留時間が重要であることを見出したことは大きな研究成果であり、永久凍土中のメタンの動態に関して得られた新たな知見が、日本側研究チームの多数の研究者により活発に学会発表され、相手側研究チームとの共著論文も国際誌に多数公表されていることは、今後の研究成果の展開として高く評価できる。一方で、本研究は観測が中心であり、モデルを専門とするグループとの連携活動が不足しているように思われた。共同で観測データの解析を実施したことにとどまらず、今後は日本側チームと相手国側チームとの交流によって新たに得られる知見を更なる研究成果として示すことが期待される。

(2) 交流成果の評価について

若手研究者や大学院生を含む日本側と EU 側の相互訪問が多数行われており活発な交流があったことが認められる。日本側研究チーム及び相手側研究チーム主催のワークショップ等が多数行われ、十分な交流がはかられたと評価できる。

本研究は参加者が非常に多かったため、今後、これらの研究参加者が国際学会や国際シンポジウムなどで研究成果の国際発信を積極的に行い、得られたサンプルや測定データなどが関連分野の研究者に広く共有されることを期待する。

(3) その他

本研究の舞台がロシアであり、EU からも多数の研究者が参加していることから、今後、日本、EU、ロシア間の研究交流が本課題をきっかけとして活発化し、多国間の研究交流に道を開くことを期待したい。